

調査捕鯨をめぐる日豪間のコンフリクトに関するオーストラリア人の意識調査

森本 誠一（文学研究科 臨床哲学）

■研究の概要

期間：2008年8月16日から2008年9月1日まで

場所：シドニー（オーストラリア）、メルボルン（オーストラリア）

内容：捕鯨をめぐる日豪間のコンフリクトの所在を明らかにすること

方法：現地の人々を対象にインフォーマルなインタビューを実施

■研究の内容

今回の調査研究では、日豪間の調査捕鯨（scientific whaling）をめぐるコンフリクトについて現地の人々にインフォーマルなインタビューを実施し、コンフリクトの所在を明らかにしようと試みた。現在では大多数の国が反捕鯨国であり、捕鯨をめぐるのは日豪間に限らずグローバルな次元で政治的、経済的、文化的な摩擦が生じているが、オーストラリアは南極海での調査捕鯨に対する妨害活動の拠点になっていることから両国間のコンフリクトは特に激しく、顕在化している。

本研究では捕鯨問題に当事者として関わっている人びと（あるいは団体）の意見に耳を傾けることを重視し、グリーンピース（シドニー）とシーシェパード（メルボルン）のオーストラリア支部へ取材するとともに、ホエールウォッチングへ参加しツアー会社と参加者にインタビューを行った。また、シドニー、メルボルン各都市で現地の人々にインフォーマルなインタビューを実施した。

■研究の成果

今回の調査研究で得られた成果は大きく3つ挙げることができる。以下、それぞれの成果について紹介する。

（1）捕鯨に反対する理由について

発表者は倫理学の観点から「なぜ捕鯨は禁止されるべきなのか」「食肉のために鯨を殺すことと牛を殺すことのあいだに道徳的な違いはあるのか」といった道徳的命題に対して捕鯨に反対する人びとがどのように答えるのかということに関心があった。捕鯨がよいか悪いかというのは道徳的な価値判断の問題であるから、捕鯨を是認ないし否認する人びとがどのような根拠に基づいてそのような判断を下しているのかを明らかにすれば、捕鯨をめぐるコンフリクトの所在も明らかになるのではないかという想定が裏にあったからだ。

だがインタビューをしてみると、オーストラリアの人びとが捕鯨に反対する理由は「鯨が痛みを感じることでできる知性的な動物であるから」といったものではなく「鯨の絶対数が少なく捕鯨をすれば生態系の破壊につながるから」というものであった。この点で、捕鯨に反対する人びとがカンガルーやディンゴ殺しについて「数が多すぎてペスト（害虫）なのだから駆除するのは当然だ」と主張するのは立場が一貫していると言えよう。

以上のことが示しているのは、捕鯨を是認ないし否認する人びとのあいだでは事実認識のレベルで齟齬が生じており、それが捕鯨をめぐるコンフリクトへと発展しているという

ことである。したがってこのコンフリクトを解消ないし軽減するためには、まず事実認識での不一致を解消することが有効であるように思われる。

(2) 「調査捕鯨 (scientific whaling)」という表現について

日本は科学的な目的のための特別許可を IWC (国際捕鯨委員会) より得て南極海と北西太平洋において捕鯨を行っている。日本ではこれを IWC の管轄外である沿岸部での「小型捕鯨」と区別して「調査捕鯨」と呼んでいる。マスコミでも「調査捕鯨」や「調査 (捕鯨) 船」といった表現が頻繁に使われていることから、日本に暮らしている多くの人びとは「調査捕鯨」の具体的な内容までは知らないまでも表現ぐらひは聞いたことがあるだろう。

ところがオーストラリアでインタビューをしてみると「調査捕鯨」という表現はほとんど理解してもらえない。私たちは「調査捕鯨」という言葉を繰り返し聞くことによって「調査捕鯨」という科学的に必要な何らかの調査がまず存在し、その調査の一環として捕鯨が行われているものと刷り込まれているものの、そのような科学的調査の必要性について見当がつかないオーストラリアの人びとにとっては、調査のための捕鯨という概念がそもそも理解できないのである。つまり「調査捕鯨」という表現は「調査」という中立的な修飾語を「捕鯨」に冠した価値負荷的な表現であり「捕鯨」を正当化するとともにそれに対する反感を和らげる目的で意識的に利用されている表現であるおそれがあることが明らかとなった (この点については更に調査してみる価値がありそうだ)。

(3) 観光資源としての海洋生物

この点については従来から指摘されているため、再確認という程度にとどまる。私の参加したホエールウォッチングは 2 時間で 60 オーストラリア・ドル (当時の日本円換算で約 6000 円) であった。他にもインド、ドイツ、カナダから来た観光客を含め 9 人の参加者がいたので、1 回のクルーズで 5 万 4000 円を稼ぐことになる。同じようなクルーズは 1 日に 4 回ほどあることから、時間帯によって参加者の数も異なるだろうが単純に計算すれば 1 日に 21 万 6000 円になる。スタッフは仮設テントで受付をする者と小型船を操縦する者だけなので特段の経費がかかっているようにも見えず、実にこうしたテントが無数に軒を連ねているのである。期間は限られているものの数ヶ月でオーストラリアでの平均的な年収をはるかに上回る額を稼いでいることは明らかであった。

■おわりに

今回の研究では反省すべき点も少なくない。その原因は準備不足と経験不足によるものと言えるかもしれない。まず 2 週間という短期間のフィールドワークにもかかわらず調査場所をシドニーとメルボルンの 2 ヶ所選んだことは結果的には失敗であったように思う。また十分な数のインタビューがこなせなかったことについては、現地の警察や行政機関に対して街角でインタビューをするための許可を事前に得るなどの手続きを怠ったことが露呈した結果であると言えよう。

ただし今回の研究はこれで完結するものではなく、今後も継続して行っていく予定である。今月中には国内で調査を行い、来月には再びオーストラリアで 1 ヶ月間の調査研究を予定している